



別名分室
陰陽寮利休庵

つくも神

みん兎

—

急いで。急いで……。席が無くなっちゃうよお。
叫びながら、壊れた目覚ましを、走っていくのを見た。

夏の怪談というには、まだ早い。五月。
辻は、飲みすぎたのかなと、目をこする。そっと周りを窺う。

四条の橋のあたり、この辺は飲み屋が多く、夜遅くでも人通りが多い。
誰も、驚いた風もなく過ぎ去ってゆく。
たった一人、辻のすぐ後ろを歩いていたおっさんが、突如立ち止まった彼にぶつかり、怪訝そうな顔で見てそそくさと立ち去って行った。呆然とそれを見送って、はっと気付くと、もう、おかしなものは、見えなくなっていた。

賀茂川べりで酔いを醒ますことにした。
石のベンチに座り、缶コーヒーを開けて飲みながら、一息ついた。

川面を撫でてゆく風が冷やりと頬にあたり、酔いを醒ましてくれる。
それで、もう一度、おそろおそろ確かめる。きよろきよろ。

何も妖しげな幻覚は見当たらない。

やっぱり、錯覚か……。と、ほっと息をついて、晩い帰宅をした。

『 辞令 辻学 右 都市景観部 風致保全課・・・ゼロ班 に移動を命ず。 』

朝、出勤してすぐに上司から、いきなり辞令を受け取った辻は、絶句した。

移動のある時期ではない。そもそも、勤めて一年ちょっとの新米なのだ。ここの課にいたのも日が浅い。公務員ってこんななのか・・・？いや、そもそも、ゼロ班って、何？どっかの警察を舞台にした漫画のようなこの響き・・・。

辻が、混乱した目を、上司に向けると、引きつった笑顔が返ってきた。

「・・・何だか、一人長期療養でね、休んでいるらしいんだ。手が足りなくて困っているって。辻君に、来て欲しいってことらしい。・・・と、いうことでがんばってな。」

・・・と、言うことでって、何だ。問い返す間もない。

ぽんと背中を押され、わけが分からぬまま辻は、新しい部署へ送り出されてしまった。

とりあえず、その部署へ向かう。目指した課のあるあたりで訊いて見ると、訊ねられた人物は、同じ階の廊下の突き当たりを指さす。

こんな所に扉があったっけ？首を傾げながらも、礼を言う。

「あそこだけ、定時で終われないくらい忙しいらしいよ。まあ、がんばって。」

と言われ、ますます、不審を新たに募らせ、その扉を開けた。

中は、意外と広い。膨大な量の資料と、その収まった棚が所狭しと並んでいた。シーンと静まり返り、まるで、図書館か資料室のようだ。奥に小部屋があり、そこに机とパソコンがある。入って行くと、中の人物が顔を上げる。たった一人しかいないじゃないかと、辻は目を丸くした。

「やあ。辻君だね。待ってましたよ。鴨居です。よろしく。」

あれ、どこかで遭ったことがあるような・・・。辻は、ちょっと首を傾げた。

鴨居は、小柄で人の良さそうに笑っている。どこにでも、居そうなおじさんだ。五十代か・・・？辻は、頭の中でその年代の知っている人を次々と思い浮かべていく。

「昨日は、ぶつかって悪かったね。・・・でも、君も突然立ち止まるから悪いんだよ。」

「あっ！」

昨日、ぶつかったおっさんだ。しまった、嫌なことも同時に思い出したぞと、辻は思い。同時にあの目覚まし時計を連想した。あまつさえそれが、映像となって頭のなかで動き出す。目覚まし時計が、疾走して行く・・・。お陰で言葉につまっていると、辻を見る鴨居の目が猫の目のようにきらんと光った・・・ような気がした。

「ここの仕事は、他の所と違ってちょっと特殊でね。誰でもが出来る仕事・・・いや、仕事自体は誰でもできるんだが、理解してもらうのに人を選ぶというか。ともかく、昨日君を見て、白羽の矢を立てたんだ。」

「はあ・・・。」

むむ。なんだか雲行きが怪しい。ぐるぐると辻の頭で、ネガティブな気分が渦巻く。ああ、と

うとう目覚まし時計が朝の体操を踊り始めてしまった……。何のことだ。訳がわからない。

「君。昨日、奇妙なモノをみただろう？」

「……………」

目覚まし時計は今度は唄を唄い始める。辻は、顔を引きたらせた。

「時計に足がはえて、それが走って行ったとか……………」

「……………」

ブラボー！拍手をしながら目覚まし時計が叫んでいる。いや、これは辻の想像なのだが、その時の彼の混乱する気持ちを表していた。その後の、鴨居の説明は、辻の一般常識の理解の範囲を超えるものだった。

昔々の陰陽寮……。悪鬼、悪霊の都。千年の都。古都は今京都市であり、それらを封じてきた陰陽師達は、代々官が、管理をしてきた。それらが、無くなってしまえば、今まで封じてきたものも一機に噴出してくる可能性があり、また、魔を呼びやすい体質の地にそれは、必要なことで、密かに役所の中に残ったのだ。

ゼロ班は、そういう仕事を受け継いでいるのだと、聞いた。

陰陽師……。そういえば、そんな映画あったっけ。魔法使いのような人の出てくる話だよなあ……。あまりに現実離れした話に、辻はぼんやりと連想する。

何で、俺が……。とほほ……。

「まあ。心配しなくても、ほとんどが、公共工事に際しての、地鎮祭とか、お祓いを希望する時とかの、神社とかね、格所への連絡とかが主だから、そんな取り立てて大層なものでもないよ。」

「はあ……。」

「地鎮祭のほうは、工事予定を確認して、双方に連絡を入れるために、日付順にこの表を完成させる。連絡の取り方は、あとで教えるけど、机の引き出しのマニュアルを見ておいて。問題なのは、お祓いの方。こっちの山積みになってる書類を整理して、日付と場所、連絡先があるならいれて、件名をいれていくんだ。」

「はあ……。」

何で、自分は素直に納得しているんだろうと思いつつも、辻は頷く。そう。何かのまやかしかかったように、すんなりと受け入れてしまった。教えられるまま、仕事を始める。その日は、定時を過ぎて、帰れず、山積みになった件名を整理し、パソコンに向かう。

辻が、ふと気付くと、もう外は暗くなっていた。

時刻は、……。げっ、九時。件名の内容があまりにも、現実離れしていて、最初は思わず、ぶつぶつ、つつこみを入れながら入力していたが、次第に感覚も麻痺してきて、普通に打ち込んでいた。それでも、途中できって帰ればよかったものを全部入力してしまったのは、おそらくこの異常事態を飲み込めず、やけになっていたからかもしれない。

顔をあげて辻は、背中合わせに机に座っている鴨居を見た。

「辻君。無理しなくてもいいよ。急ぎのものは、無いと思うから。あっても、僕達には判断できない。貯めない程度に処理してくれてかまわない。」

背中に目でもあるのか？鴨居が絶妙な間合いで口をきいた。

「処理って、これを整理するだけなんですか？」

「今のところはね。」

「これって、口コミ怪奇スポットみたいなのばかりですよ。こんなのどうするんですか」

「まあ。一種のクレームだと思えば納得できるかな？住んでる場所が場所なんで、気にする人が多いんだよ。」

「はあ。クレームほっといてもいいんですか……。」

「いや。処理する必要のあるものと、そうでないものを見に行っけてわけるんだが、今はそいつが休んでいるもので、外注なんだ。」

「？」

怪訝そうな顔をする辻に、鴨居が頷き、辻の打ち込んだデータをUSBに入れた。

「これから、どう？飯食いに行かないか。」

「え？はい。」

だから自分、そこで、何で、頷く……と辻は心の中でつつこみを入れながらも、大人しく鴨居に連れられて、庁舎近くの店に入っていった。

町家を改造した今風の喫茶店だ。

扉をあけると、からんからんとベルの音が響く。中は普通に洋風だ。

白っぽい床にテーブル、明るい木の感じの壁で、真ん中にカウンターと、調理スペースがある。カウンターの向う、奥の席は、坪庭に面していて、其処はガラス張りになっている。町家のイメージからしたら随分明るい採光だ。坪庭の向うの建物は、こちらからは中が伺えないようになっていた。

「いらっしゃい。」

マスターがにっこり出迎えてくれる。

「マスター例の件でちょっと……。あ、ついでに飯食ってくわ。」

鴨居の言葉に頷き、マスターが坪庭に面した奥の方の席へ案内した。

椅子に腰掛け落ち着くと、辻は店内を見渡した。

他に客は、ふたり……。

ここからでは姿は見えないが、真ん中のカウンター寄りの表側の隅の席に新聞を広げた人がいる。

もうひとり、カウンターに、年配の女性が座っていた。黒いチュニックワンピースにスパッツ。長い髪を纏めて、耳にも腕にも、首からもじゃらじゃらアクセサリをいっぱい着けている。これもまた光物の入ったネイルのついた指が、今、食後の珈琲の入ったカップの持ち手を摘む。辻の視線に気付いた彼女の口角が上がり、ちらりと見て片手をひらひらさせる。うーん。独特の雰囲気だ。

からんからんとベルが鳴り、もう一人客が入ってきた。

茶髪の男だ。Tシャツにジーンズ……赤みの強い派手な色合いの茶髪以外は、いたって地味な普通の格好だ。

「ああ、腹減ったあ。マスター。ナポリタンと、珈琲頼むわ。」

「明月君。久しぶりじゃないか。」

「うん。しばらく実家帰ってたもんで。親父が腰痛めたんでかわりに……」

「おや。お盆にゃ少し早いじゃないか。」

「別にお盆だけが忙しいってわけでもないし……。まあ、お陰で小遣いもうけ出来たけど。」

お盆に忙しい？……って、実家ひょっとして寺か。会話を聞きながら、辻は思った。

ちょうどカウンターに座っていた女が、にやりと笑う。

「あんた、実家継いだほうがいいんじゃない？ 占い、ちっとも当たらないし、客がこないんじゃない、食べてけないでしょ。」

「よけいなお世話っす。大、先輩……。」

大のところを強調しながら、明月が応えた。女は、ふふんと余裕の笑みをみせて黙った。

ぐっ。何か言いかけてこらえ、明月は女を無視して、カウンターの端に陣取る。

二人とも、常連か……。辻が聞き耳をたてているのに、気付いたのか、明月がこっちを見た。鴨居に、会釈をする。

そこへ、夕飯の豚の生姜焼き定食が運ばれて来た。

「はい。お待ちどう。利休庵特製、日替わり定食。」

目の前に、ほわほわあ……と、白い湯気がたち肉の香ばしい匂いが、胃袋を刺激する。

「おわっ。うまそう。」

いただきます。割り箸をばきんとわり、ごはんと豚の生姜焼きをかき込む。

香ばしい匂い、咬むとじゅわっと肉汁が口の中に広がり、旨味と甘さ、生姜の適度な刺激が、食欲をそそる。

辻は、聞きたいことがあったのをしばし忘れて、がつがつと味わう。

マスターは、明月のオーダーしたナポリタンも調理して出すと、カウンターの端に置いてあるノートパソコンを手元に持ってきて、さっきのUSBのデーターを見ている。

鴨居たちの食事が終わったのを見て、こちらにやって来た。

「取り合えず、今のところ、聞いたことがあるような話はないよ。すべてを確認するのにどのくらいかかるかなあ……。随分たまってるなあ。」

場所も京都中に散らばって、すべての地を回って真偽の有無を確かめるにはかなり重労働だ。マスターがちらりと、カウンターを振り返り明月を見る。

早くも食べ終わって、珈琲を飲んでいた明月がカップを持ってやって来る。立ったまま画面を覗き、珈琲をひとくち飲んだ。指でここからここまでと指し示し、値段の交渉をし始める。鴨居が笑いながら、マスターに言う。

「僕達は役に立たないから、マスター、だいたいいつもの相場でやって下さい。祓いが必要な場合も同じで、あとで報告書と必要経費あげてください。」

「わかりました。ではいつものように……。」

鴨居とマスターのやり取りを尻目に、明月が件名のひとつを見つめている。

「？」

「この賀茂川べりに、血まみれの幽霊ってやつなら見たけど？」

にやりと笑った明月。そんなもん見て平気なんか……。辻が不気味な笑いに内心びくつきながら、そっと明月をうかがう。

「なあ。あんた新人？」

明月が無遠慮に辻のようすを眺める。ああと、鴨居がひとつ頷く。

「今日から、配属になった辻君。辻君、こちら明月君。彼には、こちらで時々バイトしてもらっているんだ。普段は、占いの館ってところで占い師をやってる。」

「あ、その……。よろしく。辻です。」

「あ、ども。明月です。」

ちょっと、間の抜けた挨拶を交わし、ぎこちなく笑う。おずおずと辻が聞いた。

「あの……。血まみれのって……。そんなの見たも平気なんですか。」

「別に、害のある奴じゃないから。」

「……………」

そういう問題か……。と、思いながら黙ってしまった辻のかわりに、マスターが口を開く。

「ああ、じゃあこの噂は本当なんだ。明月君、帰りに祓って来てよ。これで、一個片付くな……。」

「ええ？」

「害はないかもしれないけれど、通行中の自転車に乗った人がこれを見て転倒、けが人が出ているんだ。祓うほうに入れておいていいよね。鴨居さん。」

「そうして下さい。」

マスターの言葉に、鴨居が頷く。それから、ちょっと考えていたが、辻を見てにっこり笑い言葉を付け加えた。

「じゃあ、僕も立会いに行きますけど、辻君、君もいっしょにね。」

「え!？」

「立会い人が必要なんだよ。」

「・・・・・・・・。」

行こうかと、立ちかけた時、店のドアが勢いよく開いた。

ガラン、ガラン・・・・・・・・。ドアはカランという響きを通り越し、ガランと乱暴に鳴り響く。どすどすと若い女の子が怒った顔で入ってきた。

「もう！腹立つ・・・信じらんない。通行人の尻いきなりさわるかあ、もう。」

腹立つから、一発張り倒して、交番に放り込んできたわと開口一番わめく。

いっせいに、全員の注目を浴びた。・・・・・・・・・・。

カウンターのところにまだ、座っていた年配の女が、その女の子の姿をじろりと上から下まで眺めて、ふっと笑う。

「おまわりさん、何て言ってたあ？」

ちょっと小ばかにしたような視線に、女の子は反発したのかくわっと、睨み返す。悠然と女は、受け流す。

「超むかつく！あのおまわりも、そんな格好で歩いてるからだって、説教しやがんの。被害者は、こっちだつての・・・。」

女の子は、小麦色に焼けた肌、丸い目を濃いマスカラで隈取し、まつげばさばさ、ブルーにパールの入ったアイシャドウ、目力を強調した、可愛い顔をしているのにちょっと怖い感じの、今風の感じの子だ。それは、ともかく、身に着けている物がすごい。どうみても、真夏の海岸を歩いていそうな、露出度の高いミニのワンピーススタイルだ。上衣は大きく胸と背中が開いていて、下に、これも重ね着スタイルのうちなのだろうか・・・ビキニが見えていた。昨今、ブラのひもが見えるのは見かけるが、これは突き抜けている。

マスターと、目が合うと、一瞬彼は情けなさそうな顔をした。

「美夜・・・おかえり。その格好はちょっと・・・。」

美夜が、ふくれっつらになる。言いかえそうとした時、ばんっと突然背中を叩かれる。

「きゃあ！」

通りすぎる美夜の背中を、カウンターに座っていた女が軽く叩いたのだ。

「親に口ごたえしない。ここまで大きくしてもらったんでしょ。ちゃんと、頭の中身も大人になってから反論しなさいよ。それから、そのおまわりさんも正しいわ。あんたのその格好で襲われても、文句言えないわよ。」

「なんやてえ？」

「何？お客様に文句言うの？」

ぐうう・・・。さすがに美夜も、客に息巻くのは止めた。ぷいっと、そっぽを向く。それから、やっと鴨居たちに気付き、怒りを解いて近付いて来た。カウンターの女は、余裕の笑みでその様子を見ていた。

「こんにちは。」

意外にも、感じ良く挨拶し、鴨居の前に置いてあるノートパソコンを覗く。

「ふーん。割り当て、全部決まってんの？」

「いや。」

近くにいた明月が、無言で自分の分を示す。

「じゃあ、私、ここからここまでね。ねえ、そっちの新しい人が、立会いにくんの？」

「あ、いや・・・まだ、慣れないんで、ほとんどが僕だよ。すまないね。」

「鴨居さんか・・・。ま、いっか。」

美夜は、あっさり納得して、奥へ入ってしまった。

「すげー。相変わらず、自分の言いたい事だけ・・・台風みたいな奴。」

と、明月。

「すみませんねえ。どうも、しつけがなくて・・・。」

マスターが気弱な表情で、謝る。鴨居は、手をちょっと横に振りながら、気にしないよと言いきえた。

カウンターから、こちらへやって来た女が、枯れ木のような細い指で、残った部分を指差す。バックから、財布を取り出し、勘定をマスターに渡すと。

「これから、仕事だから。明日また、リストを貰いに来るわ。マスター。ごちそうさま。今日もおいしかったわ。」

これから・・・仕事って・・・。じっと見ている辻の視線に気付いたのか。女は、バックからカードを一枚ちらりと見せる。タロットカードだ。占い師か。と、辻の納得した顔へ、手でバイバイとして、女が店を出て行った。

からんからん・・・と、音が静まると、店内は急に寂しくなった。

「じゃあ、僕たちも行こうか。明月君頼むわ。」

鴨居の声に促されて、立ち上がる。店を出しな、カウンターに影になるように座っている人物がいることを思い出し、辻は横目で確かめる。

まだ、新聞を広げている。あの人も、関係者なのだろうか・・・。カサッと新聞紙の音がして、身動きした様子が伝わってきたと思うと、テーブルの上の、新聞からひょこんと何かはみ出しているのに気付く。ん？細長くて白いもこもこして、うさぎの足のような・・・？

もう一度、よく見ようと目を凝らすと、何もありません。きっと気のせいだな。首を振り、辻は鴨居と明月に続いて店を出た。

何ダ、目ノイイ奴ダッタナ・・・。その呟きは、辻には届かなかった。

四条通を東へ、賀茂川に掛かる橋を渡る。川沿いには遊歩道が整備されて、夜は灯籠の明かりにも似た照明が点灯し、風情のある流域だ。対岸の西側は、夏になると床と呼ばれる賀茂川の涼を楽しむ屋外の飲食スペースが賑わいを見せるが、さすがに五月とあってはまだ、やっている所も少ない。対岸の賑やかさは、こちらまでは伝わって来なかった。

遊歩道を南へ下がる。雰囲気のある道を目的地まで少し歩く。

前を行く明月が、ぼりぼりと頭をかいた。

「野郎ばっかで、歩くところじゃないよなあ……。」

それでなくとも、川べりはカップルが多いのに……。雰囲気があって、綺麗な景色。薄暗いとあっては、カップルの出没率の高くなることと言ったら……。明月のぼやきを、鴨居は笑って聞いている。

「っとにどいつもこいつも……。」

べたべたしている……。二人の世界に入っているのだから、通行人たちのあることは眼中にない。

「ま、いいじゃないですか。迷惑をかけているわけではないんですから……もしかしたら、将来あなたのところに相談に来る人もいるかもしれませんよ。」

「……それ、揉めてるの限定じゃないか……。」

片思いの人のことを占ってみたいという軽い気持ちならともかく、すでに成立したカップルの悩みなんて……。良い方の話は知人や友人にアドバイスを貰うだろうが。占い師の所へ来る時なんて、人に相談しにくいことがあるに決まってる。結構、黒い人だなあと、明月が呟く。鴨居がわはは……と、愉快そうに笑う。

なんだかのんきな会話だ。今から、怪談の現場に赴くって感じじゃないよなあ。辻は、軽く脱力感を味わう。それでも、そのまま歩いていると、急に人影が無くなってしまった。

どういうわけか、その周りだけ人の姿をまったくみかけない。

気のせいかな、照明も他より暗く。すぐそばに大きな道路があるというのに、物音が途絶えたように静かだ。明月が、立ち止まったので、この場所なんだなと、直感し、辻は緊張して成り行きを見守った。なぜだか、背筋に冷や汗を感じる。

ちょうど、向うから人が歩いてく来るのを見止めて、ほっとしながら、その人物が通り過ぎるのを見ていた。

「おい。」

明月に呼び止められ、くるりと、振り返える人。

「！」

ぎゃあああ……！幽霊！辻の叫び声は、すかさず鴨居が後ろから羽交い絞めにして口を押さえているので、辺りには響かず終わった。

振り返った人は腕の部分がなく、赤黒く変色した色で体が彩られて……。

大丈夫だから、落ち着けと言われ、騒がないと約束して、辻は鴨居から解放され、ほっと一息つく。こわごわ顔をあげて、幽霊らしき人物を見る。そいつの茶色く変色した顔は、頬の皺がくっきり浮かんで、よくみると目は洞のように黒く白目がない。

「よく見てみ。これ血まみれじゃあ、ないから……。」

明月が指差した体の部分を見してみる。

「……あっ。」

服だ。そいつは薄い紗のような布を身に着けている。紅色が、赤黒く変色した血の色に見えたのだ。

「まったく、そんな姿でうろうろするなよ！迷惑だ。」

茶髪の明月がすごむと、そいつは頭をうなだれて、しくしく泣き始める。

「……………」

もじもじ、しおしお……あつけにとられる三人を尻目に、泣き続ける。さすがに、辻も恐さが麻痺して、不覚にも可哀相だなどと思ってしまう。明月が、溜息をついた。自分の荷物の中から、ペットボトルを出し、にゅっとそいつの前に突き出す。

「まあ、これでも飲んで、落ち着いて話せ。」

「あ、ありがとうございます。南アルプスの水ですね……。うーん。松尾大社の亀の井の水を飲んでみたいなあ……。」

亀の井の水は、京都の名水のうちのひとつだ。紅葉は、どこでそんな情報を仕入れたのか、注文をつけた。

「贅沢を言うな。今はこれしかないんだ。今度持ってきてやるから、何で彷徨ってるんだか早く話せ。」

「わあ。本当ですか。きっとですよお。」

「ああ。はよ、話せ。」

そう言われて、また思い出したのか、しくしく泣き始める。今度は、理由も話した。

「……痛い。」

腕のあるべきところを指して、訴える。

「ああ。折られてしまったのか……。」

明月は、不思議そうにしている鴨居と辻の視線を感じたのか。彼らにも、わかるように質問をかえる。

「赤くなるやつは、紅葉だと思うけど……それで、お前はこの辺のどこに生えているの？」

紅葉の木……。言われてみれば、頬のしわは、木の幹のようだ。茶色い肌は幹の色だ。

そいつ……紅葉は、すぐ近くの木を指差した。

「それにしても、今の季節なら、緑の筈だよな・・・。」

「え？あ、気付いて貰おうと、おめかししてみたんですが・・・緑じゃ地味かなって。」

「紛らわしい。」

えへっ。紅葉がおちゃめに笑い。話を聞いてくれる人を探して、うろうろしていたものの、誰も気付くひとはいない。派手に着飾ってみてはどうだろうかと思い、紅葉の色にしてみたのだという。それでも、気付いてくれる人は少ない。その少数の人も、すぐに逃げて行ってしまふのだと、ぼやく。・・・それはそうだろうと、皆一様に頷く。からからに乾いて茶色く変色したような顔色を見ればすれ違った人は、ぎょっとするに違いない。所々、紅い模様の散らばった服は、暗がりで見れば、血の飛び散った痕の様に錯覚を起こし、干からびたような皮膚が・・・しくしく泣きながら話しかけてくれば、もう血まみれの幽霊としか認識しなかったのではないか。そりゃ、普通逃げてゆくだろうと、言ってやる。

「そうですかあ。どうも、すみません。」

「・・・・・・・・。」

人間と感覚が違うから仕方ないか・・・と、明月が溜息をもらし、幹のところへ確かめに行った。誰かに、枝がもぎ取られて、木肌に傷がいつている。樹皮がべらべらと風に靡いている。明月が絆創膏を出して、ちらちら、それを眺めて考えている。

「明月君・・・。樹木にそれはないやろ・・・。植木屋さんかなあ。」

鴨居も寄ってきて考える。

「そうですねえ。河川の管理は、府の管轄かなあ。それとも、これは街路樹？だったら、市側かな・・・。」

辻も、状況に慣れて、寄って来た。

考えていても埒があかないので、明月がぼんと手を打ち、紅葉に約束する。

「俺たちじゃ、変にさわって枯れてもいけないし、植木屋さんに頼んでもらうから、今日のところはがまんして。」

「うーん。そうですね。専門家の方が私も好いですし・・・。でも、本当に頼んで下さいます？あなたたち、酔っ払いの皆さんじゃないですよ？明日になっても、おぼえてて、下さいますか？」

と、妙な勘繰りを見せる紅葉。

「大丈夫。こっちは、市から派遣された職員の方たちだから。」

明月が鴨居と辻を指し示し、請合う。鴨居が、穏やかな調子で約束した。

「じゃ、なるべく早くお願いしますね。」

「そのかわり、もうその格好でうろつくな。その姿を見て驚いた通行人が転倒して、怪我をしたって苦情が出てんだ。」

「え？あ、どうもすみません・・・。」

「これ以上、人に迷惑をかけたら、伐られるぞ。」

「ええ！じゃあ、もうでません・・・。」

「約束だぞ。」

「約束します。」

明月が、紅葉に約束させると。くれぐれも宜しくお願ひしますと言って、紅葉は慌てて幹のところに戻って消えていった。

紅葉の姿が煙のようにかき消えると、とりあえず、一件落着……。

こんなんでもいいのか……。もっと大仰なものを想像していたので辻は、ほっとしながらも釈然としない感じだ。明月が笑う。

「だいたいこんなもんだ。納得してくれたんだからいいじゃないか。律儀そうなやつだから、こちらが約束を果たしてやれば、もう出ないだろうし。共存共栄ってやつだ。」

「共存共栄ですか……。」

「それより、きちんと約束守ってやってくれよ。」

「あ、はい。もちろん。ちゃんと手配しときます。」

答える辻の前に、明月の右手が差し出された。握手を交わす。

「これから、よろしく。」

しかし、公務員に折角なれたのに、これからずっと同じ部署とは……出世からはみはなされたな……という明月の言葉は、鴨居の咳払いにかき消されて、辻の耳には届かず。他の立会いを必要とする件について、一週間以内に連絡すると言って、明月は帰って行った。

「これで、少しは納得がいったかな……。」

鴨居の言葉に、辻が頷く。

「はあ。まあ、狐につままれたって感じは残りますけどね。仕事だと思って割り切ります。」

「よかった……。見えない人に来てもらっても、仕事を理解してもらえないから、助かるよ。昔は、関係者が入ってきてたんだけど。」

「え？」

「あの部屋の机の数、多かったろう？昔は、沢山いたらしい。」

確かに、今休んでいる一人と、自分、鴨居の三人にしては、部屋も広いし、机の数も多い。それだけ、需要は減っているのだと言った。

「良い事なのか、悪いことなのか、断定できないが。信じない人も増えているから……。まあ、いつまであるかわからない部署だけど、それまではがんばろうよ。」

「はあ……。」

何だか間の抜けた感じだが、思わず辻は頷いていた。

次の日、さっそくあの紅葉の為に、手配をした。週末にはわざわざ松尾大社まで行って、水を貰ってきて、辻は紅葉に水をかけてやる。こころなしか、幹がつやつやと輝いて、喜んでいるような気がした。

六月。朝から、じめじめと雨が降っていた。

「出張行ってきます。」

鴨居にそう言って、二時頃、辻は、庁舎を出た。利休庵へ向かうが、約束よりちょっと早く着きそうなので、ゆっくりと通り沿いの店先を眺めながら歩く。この通りは、画廊、伝統工芸品、エスニックなど様々な雑貨を置いた店、など、見ていて飽きない。

アンティークのお店……。綺麗に補修された家具など、古い道具類が飾られている。古いものの独特の艶が目を和ませてくれる。通り過ぎるとき、辻はふと足を止めて、きよろきよろと辺りを見回した。店の隅に積み上げてある、修理前の品物を見つめた。

大きな籠の上に、細かい道具類が山積みになっている。随分雑な扱いで、修理前だと思ったが、もしかしたらもう売り物にもならないものなのかもしれない……。

「ダ、ダジュゲデグレエ……」

うんうん・・唸る声がする。よくみると、山積みになった真ん中あたりで、小さくカタカタ音がしていた。あ、目覚まし時計……。辻が以前、夜中に走って行く目覚まし時計を見た、あれにそっくりである。近付き、山の中から拾い上げた。

「毎度あり……。」

店員のにこやかな顔に見送られて店を出る。ついお買い上げしてしまった……。

辻は、ガラクタの山の真ん中で、じたばた助けてくれという目覚まし時計が哀れになり、ついつい購入してしまった。こんなもん、どうするんだよ、と。紙袋の中で、ばたばた暴れる声が、通行人に聞こえやしないかと、ドキドキしながら、利休庵へ向かう。幸いにも、道行く人は誰も振り返らない。自分を不審な目で見ると人などには出くわさなかった。

からんからん……。ベルの音が響き、利休庵のドアが開いた。ちょうど、すれ違いに中にいた外人客たちが出て行き、店の中はお客がいなくなった。

「いらっしゃい。」

辻は、奥の中庭のみえるガラス張りの隣りに陣取る。この景色にも随分馴染んだ。この仕事になって日は浅いが、ここ利休庵へ来ることは多い。週のうち顔を出さない日がないほど来ている時もあり、誰かしらお祓いをする怪しげな人達と会ってる。ここのマスターが手配をしているので、鴨居と辻が入れ替わり立ち代り出入りしていた。まるで、ここが彼らの部署の分室のようになっていた。

落ち着いて、よく見ると、カウンターの端に、また、新聞を広げた人がいる。

「騒音オバサンか……。こういうのも一種の鬼というかね……。うーん。……このアップルティおいしい。」

新聞を読む割と低めの声が聞こえたと思ったら、がさがさ・・と新聞を折りたたむ音がして、中からうさぎが現れた。

何、うさぎ？……と、辻は目を擦る。さすがに、妖しいものには慣れてきたので、驚きの声をあげることはなかったが、目が合うと、うさぎの目がにやっと笑った。

「面白そうなもの持っているじゃないか。」

うさぎは辻の持っている紙袋を指差す。とてとて二本足で歩いて、ぴよんと向かいの席に座る。彼から、紙袋を受け取ると、中身を興味深そうに見ている。

目覚まし時計が、逃げようとじたばたしている。うさぎは、にやりと目を細める。面白そうに裏返してみたり、逆さまに足をつまんで、ぶらぶらしてみたり……。弄りたおしている。止めてくれという目覚まし時計の悲鳴が店内に木霊した。

コトッ。テーブルにティカップが置かれる。マスターが、うさぎのさっき飲んでいたお茶を向うのカウンターの席から移動させたのだ。

「お客さま・・・店内で騒ぎは起こさないで下さい。」

にっこり笑って、マスターがくぎを刺す。うさぎが視線をあげマスターを見て、ちょこっと小首を傾げた。まったく悪びれるふうもない。

「あのう・・・」

辻が遠慮がちに声をかけながら、マスターに目の前のうさぎについて訊ねる。

「ああ。このうさぎね・・・えっと、式神って言葉きいたことがある？」

「いえ。」

首を振る。マスターは、ちょっと考えて、簡単に陰陽師が使う使役霊とか鬼のことだと説明する。

「へえ。動物霊なのかな・・・。映画とかで、人のかたちをした白い紙がいっぱい飛んでくシーンもあれもかな？」

「そうだね。」

「いっしょにするな。あんな意思を持たないものと、格が違うのだ。」

うさぎが声をあげた。マスターは、ちょっと笑って。

「まあそれだけに扱いが難しいらしいよ。生半可な術者には使えないだろうね。」

「らしいって、マスターのじゃないんですか？」

「明月君の・・・あれ？まだだっけ？」

うさぎの耳がぴくんと動いた。

「あいつ・・・ひどいのだ。うっかり封印を解いておいて、認めないのだ。」

本気でそう思っているのかいないのか、ちらりと一瞥をくれただけで、うさぎの興味は、手に捕まえている時計のやつに向いている。時計の止まった針を不思議そうに見ている。

「壊れているから動かないよ。」

辻の言葉にしゅんぼりと耳が垂れる。なんだかペットみたいでかわいい。辻は、手を出してうさぎから時計を返して貰い、中をあけて調べる。マスターから、道具を借りて直し始めた。時計のやつは、やけに神妙にしている。うさぎの期待に満ち溢れた目と、目があう。

「直るのか？」

「うん。たぶん大丈夫だと思うよ。」

最後にきゅっと、ちいさな螺子をしめて終わり。マスターが電池をくれた。時計の秒針がちゅちゅと動き出す。うさぎがおおっと口を開け、ちょっと上向きになる。

「気に入ったみたいだから、あげるよ。」

辻はうさぎに時計を渡した。うさぎは、ぴよんと床におり、うれしそうに時計を頭に頂いて、くるりとまわる。

「感謝する。あいにく主は決まっておるが、いつかなんかのかたちで礼をするのだ。」

「いや別に構わないよ。実は、買ってしまったもののそれをどうしていいか、扱いにこまっていたんだ。へんなものが取り付いてるの、わかってるのにね。」

「へんなもの?・・・ああ、これは九十九神。この国には昔から、万物に魂が宿るといわれるのだ。知らないのか？」

「へえ。じゃあ、何にでも？」

「うーん。全部こんなふうというわけでもないのだが・・・。これは、持ち主が意外と大事に扱っていたらしい。」

「ふうん。」

わかったような、わからんような・・・。辻は、時計を見つめた。大事に扱われていたけど、壊れてしまったから、古道具屋にいたのかな・・・？あれ？大事なことを忘れてるよ
うな・・・。

からんからん。店のドアが開いた。ちょうどそこへ、明月が入ってきた。

「悪い、遅くなりました。」

明月は、辻のいるテーブルまでやって来て、席につくと、冷たい飲み物とデザートをとのんだ。

「明月君。それ、全部食べるの・・・。」

辻は、自分の飲みかけの珈琲のはいったカップを置いて、呆然と見つめる。

「遅れてきて申し訳ないんだけど、ちょっと体力使いそうなので、補給しときます。」

明月は、そういうと、まず、珈琲についている干菓子をぱくりと口に放り込む。テーブルには、沢山の菓子が並べられていった。

水無月。豆大福。みたらし団子。羊羹・・・などの和菓子類が、いつもの凝った皿にセンスよく盛り付けられたのと違い、これでもかと皿に山盛りになっている。宝石のような赤い苺ののったショートケーキは、店の今日のお勧めだが、1ホール大皿にどさりとテーブルに出される。

「こういう出し方は、僕もしたくはないのだが・・・。」

マスターが不本意そうにつぶやく。そういうしりから、明月の口につぎつぎとすいこまれていき、おかわりとばかりに空になった皿が差し出される。マスターが慌てて、次を持ってくる。がつつ・・・。ぱくぱくと、それがスイーツとは思えないほど、豪快に食されていく。どん。これでどうだと言わんばかりに、ボールいっぱいに入ったライスプディングが置かれる。明月はそれもぺろりと平らげると、ごっそさんと手を合わせて、水を飲み干した。胸がむかつきそうだ・・・見ている辻の方が腹がいっぱいになった。

「相変わらず異常な食欲なのだ。明月。腹に虫でも飼っているのではないか・・・。」

うさぎの言葉に、明月が今やっと気付いたというふうにそちらを見る。じろりと睨む。

「なんだ。まだ成仏してないんか。」

「我は式神なのだ。何度言ったらわかるんだ。」

「ふうん？」

意地悪な視線に、うさぎの耳が垂れる。明月は分かって言っているのだ。お前なんか知るかという態度に、すっかりへこんだ風だ。辻が、うさぎを擁護した。

「何だか、かわいそうだよ。明月さん、この間共存共栄とかって言ってたじゃないですか。あの後、ちゃんと亀の井の水を紅葉に差し入れしてやってたじゃないですか。このうさぎにだって優しくしてやったら？」

「そんな生易しい存在じゃないぞ？これは。・・・ところで、その時計のは何だ？」

明月の関心が自分に向いているので、うさぎはすぐに気を取り直す。だが、全く違うことを話した。耳がぴんと伸びる。

「これを貰ったのだが、こいつ逃げようとするのだ。」

あまりにも事情が分からないので、いきさつは、辻が補足した。うさぎが握っている時計は手足をばたばたさせ、離せと言っている。ふうんと、明月の視線が時計に注がれる。

時計が行かなければ・・・と、叫んでいる。

「お前。そんなに行きたいところがあるのか？」

明月と、同時にうさぎの目が、じろりと剣呑に光る。時計が一瞬びくりとなる。

時計は、老人の持ち物だった。壊れてしまっても、形が気に入っているからと、大事に茶の間に飾られていたのだが、老人が亡くなり、遺品はすべて処分されることになった。永遠に命あるものなどないのだ。人であっても、物であってもこの世での役目を終えると、いつか形もなくなる。仕方がないと諦めかけたのだが、庭のカラスの話を耳にして気が変わった。自分のような壊れた物たちでも、楽しく暮らせる所があるという。どんな所だろうと思った時、風に乗って呼ぶ声が微かに聞こえてきた。行きたいと思った瞬間、足が生え、気がつく、その家から逃げ出していた。

「パラダイスなんだ！そこへ行こうとしていたら、間違えてあの店にもぐりこんでしまった。こちらの方に助けて頂いたのは、有難いことだが、しかし、そこへ行かねば・・・。」

時計は、憧憬を滲ませ、何かに憑かれた（実際、取り付いているようなものだが）ようにうっとり遠くを見つめている。聞きながら、明月がしきりと何かを考えている風だった。

「ふうん・・・。たぶん、そこ今から行くと思うけれど、来る？」

「おお！連れて行って貰えるのか？」

「うん。でも、お前さんが考えているようなのじゃ、ないかもよ？直して貰ったんなら、時計としてこのままそこへ行かずに、存在していた方がいいんじゃないのかと思うけれど？それでも行く？」

「行く！」

パラダイス。パラダイス・・・と、時計が嬉しそうにはしゃいでいる。うさぎが複雑な顔で、明月を見ている。突然、ぴよんと、椅子から降りる。

「我也行く。」

「へえ？ついてくるの？」

明月の問いに、うんと頷く。

「これの持ち主は、我なのだ。責任がある。それに、明月はともかく、辻は素人だから危ないのだ。これを貰った恩がある。」

「ま、いいか。それなら、周りに見えないようについて来いよ。・・・それじゃ、辻さん、行き

ましようか。向こうへ着いてから、説明します。」

時計に紐をかけて、うさぎの首から吊り下げる。連れて行って貰えるのがわかっているので、時計は大人しくしている。

「気をつけて。」

マスターに見送られて、店を出ると、うさぎと時計は姿が見えなくなった。

京都らしい町家の立ち並んだ一角を歩く。狭い道に、古い木造二階建て。通りに面した家々は、横幅が狭く、こちらからは中が伺えないが入ってみると、奥まで思ったよりも続く家が多い。細長いうなぎの寝床といわれる建物を両脇に見ながら、辻達は目的地へついた。

続いていた家並みが当然ぽっかりと穴が開いたようにその一軒分だけなくなっていた。古い建物がなくなって、更地になっている。

その横、かつては家と家の間にあっただであろう場所に細い路地がある。人が一人か二人通れる狭い石畳の路地。小さいけれど潜れる赤い朱塗りの鳥居が存在し、その奥の突き当たりになった場所に、小さな祠がある。市内には、こんなふう小さな祠が多く、道の角や家の軒先にちょこんと、置かれている風景は至るところにあるが、ここは、狭いながらも参道らしきものも備えている。祠自体は小さく、かわいい。箱庭みたいに、両脇に背の低い植木が植えられていた。

明月に続いて辻が、かわいらしい赤い鳥居を潜る。

神社へ詣でる時の仕草を、明月を真似て辻も行う。二礼、二拍手、一礼。

しばらくすると、祠にぼんやりと金色の小さな灯りが灯った。それは、渦を巻くように円を描いて、それがだんだん近付いてくる。辻たちの目の前で、金色のしっぽを持つ狐に変わった。辻は目を見張る。さすがに、妖しげなものにも慣れたが、いつみても驚きの光景だ。祠から現れたので、神様かと思った。なんとなく、今までに見た妖しげなものとは違い、取り巻いている空気がきれいだ。

ぼおっと見ていると、目が合う。狐の細長い切れ長の目がにゅっ。細められる。

「やっと来たか。早く隣りをなんとかしてくれ。」

狐は明月にそう言って、隣の空き地を鼻先で示す。

「わあ。すごいごみですねえ。・・・あれ、ごみでもないのか・・・な？」

思わず声をあげてしまったのは辻だ。つられてみた先の隣の空き地には、物がうず高く所狭しと置かれている。さっきまで、気にも留めなかったことが不思議に思えた。

古い階段筆筒。ちゃぶ台。扇風機。豪華な椅子。みんな古びていらなくなった物ばかりが、所狭しと空き地に山済みにされている。

先日。山積みになった道具類の天辺から落ちてきた物が、祠の屋根の一部を壊したのだと、狐がこぼした。町の人が応急処置をしてくれたが、隣はますます物が増えていく。いつまた物が落ちてきて、今度は祠自体を潰してしまうかもしれない。こんなことなら、ここを離れようかと狐は思っているのだが、町の人がこまめに世話を焼いてくれるここは、静かで気に入ってもいる。出来れば、空き地の方を何とかして欲しいのだと、狐が嘆息した。

「すごい・・・。」

「ひどいのだ。」

呟く辻の隣りにいつのまにかうさぎが姿を現して立っている。辻にうさぎが訊いた。

「これも、直せるのか？」

「こんなのが好きな人もいると思うし・・・まだ、手入れをしたら使えそうだけれど。多すぎ

だよ。・・・あれ？ひょっとして時計君はここへ向かっていたんじゃないの。」

「うおおおお・・・なんだ、ここは。この前いた所よりひどい。確かに、ここに仲間を呼ぶ声をするのにいいいい・・・！さぎだ。ごみの山だ！」

頭を抱え、時計が叫んでいる。すると、ごみの山の方から、薄い靄が・・・黒い陰がしたからしみ出てきたかと思うと、ぼんやりと空き地に充満した。ほんの一瞬で霧は影も形も無くなりかき消えてしまったが、替わりにかちゃりとひとりでに物が動き出しす。

「ごみの山だとおおお・・・！」

反発するように突如沸き起こった声。時計の言葉に憤りの声をあげた、物たち。からから・・・ころころ・・・と山の上の古いラジオや比較的小さな物たちが転がって降りてきて手足が生える。一斉に辻や明月たちのいる祠に向かって来るわ。攻撃してくるわ。実際には無い筈の手や足が伸びて、ぼかすか殴る蹴るの暴行を加える。

「うわっ！」

辻が声をあげる。殴られると思った瞬間、うさぎの手が何倍にも大きくなり、盾のようになり防いでくれ、大きくなった掌が次々やって来る物たちをぎゅっと包む。その度に拳が大きくなっている。

「明月、どうするのだ。小さい奴はともかく、大きい箆筒とかまで動き始めたぞ。あれらも握ったら、この狭い空間はいっぱいになってしまう。」

そうになったら、祠まで押しつぶしてしまう。

「さあて、どうやって説得するかな・・・。」

明月が空き地の方へ踏み出す。するとまた、黒い靄が染み出て、一瞬のうちにかき消えた。明月の視線が厳しくなる。それが、合図だったのだろうか・・・。

ぶわん・・・！！扇風機たちがいっせいに回りだして大風が起こった。彼らは大勢いたので竜巻が起こり、周りの民家の壁が揺れた。

「いかん！」

祠の主の狐がそう叫び、しっぽを一振りすると金色の輝きが空き地全体を包み、囲んだ。結界を敷いたのだ。見えない壁のなかで、まるで洗濯機の中のように風がぐるぐる渦を巻いて、物たちが巻き上げられて、お互いぶつかり悲鳴をあげる。

「ひいい・・・！たすけてくれえええ・・・！」

「おおい！聞こえてるかあ？扇風機たち、風を止めろ！お前達はその惨事をまきおこしているんだあ！風を止めろ！」

明月が叫ぶ。風が一斉に止んだ。すると、物たちが地面に納まる。

「ここは、俺たちの王国。入ってくるな！」

そうだそうだと叫び。パラダイスと叫び、踊りだす奴まで出て来た。すると、今度はしばらくお祭り騒ぎだ。楽しそうに明月達のことを忘れて騒いでいるのを良い事に、明月が辻に耳打ちする。

「辻さん。今のうちにこっそりここを離れて、その辺の店で油揚げを大量に買って来て下さい。」

」

「どれくらい？」

「うーん。とりあえず百・・・。」

「そんなに・・・。」

「なるべく早くお願いします。」

辻は頷くと、そっところを離れて、一目散に油揚げを買いに走っていく。

それを見届けると、明月は大きく息を吸い込み、呼びかける。だが、お祭り騒ぎの物たちは聞いちゃいない。溜息をつく明月とうさぎの目があう。うさぎの目がにちゃっと笑う。

「我を使うのだ。」

「しゃあないか・・・。奴らをこっち向かせろ。」

聞くが速いか。うさぎは、ふんと大きく鼻息を向うへお見舞いする。大きな風が、ひとつ、ふたつ大きな筆筒を吹き飛ばし、がちやりとぶつかると、お祭り騒ぎは収まった。

ダン！うさぎの足が大きく地を叩いた。ダン、ダンと足ダンの音が大きく響く。話を聞けとばかりに、足ダンし続け、その度隣りの空き地の地面だけが上下した。わ、わ、わ、と慌てる物たち。トランポリンの上で揺れて跳ねているような状態なので、文句を言っている余裕はない。やがて、それは収まり、皆地面に転がったが、しばらく、揺すられて元気もないので、静かだ。恐ろしい目にあったと一斉に溜息が漏れた。見計らって、明月が口を開く。

「・・・わかった王国を作りたいのだな。だが、お前達、それ以上増え続けてどうする気だ？もう敷地にいっぱい限界だ。そう思わないか？」

「ううう・・・。でも、ここを必要としている人がいるんだあ。」

口々に悲鳴のような声が響く。ガラスの擦れるような甲高い音が重なって、辺りに反響し、耳を直撃する。明月は、顔を顰めた。それでも、怯むわけにはいかない。ちらりと、式神のうさぎをみると、うさぎがまた、足だんで地面を揺らす。

だん！だん！いっせいに空き地の物たちが上下して、地面に戻る。

「お前達、ただ集まりたいなら、ごみの島へでも行け！」

「なんだとおおお・・・！」

「おい、そこの筆筒！お前は、ここに居ただけなのか。まだ、使えるのに、もったいないと思わないか。本当の望みは何だ？」

問いかけてみるが、とりあえず騒ぎを起こす前触れの黒い靄は現れていない。今のうち急いで話をまとめなければならぬと、明月が近くで一番騒いでいた筆筒にターゲットを絞り、問う。明月の言葉は、奇妙にあたりに反響した。指名されて、筆筒の体が微妙に揺れる。考えが纏まらない筆筒に向かって、すかさず、ここぞとばかりに誉めたてる。

あめ色で独特のつやの出た木目。和的なデザインは古びているからこそ、しっかりと収まり、今の家具にはない良さが出ている。加えて、昔の町家のサイズに適した、大きすぎないおおきさも魅力だ。・・・明月は、思いつく限りの利点を考える暇も与えないほど、挙げた。そして、ふいに言葉をとぎらせて、じっと筆筒に視線を注いだ。

「お前は、まだ役に立つんだ。」

「そ、そのとおりだ・・・だけど・・・。」

「この場所に居続けたって、再び活躍する機会には恵まれないぞ？道具が道具を使ってやることは出来ないだろう？・・・おい、そっちの扇風機。お前の形も古びていい味を出しているじゃないか。アンティークショップとかで、似たようなのを見かけるぞ。」

話の矛先をいきなり、扇風機に向けてみる。

「だ、だけど、ここに置かれたまま忘れ去られたままなんだ。」

ぶわん……。一瞬羽根をぐるりと回し、すぐに止めて、躊躇しながら扇風機が応える。明月が、うんと頷く。かたっぱしから、目に付く道具たちにひとつひとつ視線を当てて、訊いてゆく。どれも、行き場がないからここに集まってきている物ばかりだった。

「ここにいる時計は、古道具屋の店の修理前の品の籠の中から、見つけてもらい。修理までしてもらって、ほらこの通り。元の通りに動いている。これから、役にたつて喜んでもらえる人に出会えたんだ。そうだな、時計？」

「う、ああそうだ……。その、恩人にめぐり合えて、時計として復活したっ……。」

うさぎが、目覚まし時計を頭の上に掲げて、よく見えるように示してやっている。時計の持ち主は人ではないけれど……。持ち主の視線と、明月の視線に一瞬宿った剣呑なひかりに脅されて、とりあえず、自分が復活して満足していることだけを声高に叫んで、請負う。でも、考えてみれば、喜んで持って貰っているのだ。自らにとっても悪い話ではないのかもしれないと、言いながら考えてしまい、時計は時計自身も納得してしまった。そうすると、やおら自信が出て、態度も変わる。言葉も力強く、復活した……。と、物達は、静まり返って、時計のこの言葉を反芻している。

ちょうどそこへ辻が、油揚げを沢山抱えて帰って来た。明月はその姿を目の端に見とめて、話をまとめにかかる。

「お前達は、ちょっと古くなってしまって、必要とする人が限定されてしまったけれど、まだ、喜んで貰える機会は残されている。どうだ。ここから出ないか？」

「で、出るってどこへ……。どうやって？」

「こちらのお稲荷様の力を借りるんだ。」

明月はにっこりと笑う。何か企みがあるような、いささか人の悪い笑みだ。振り返って、お稲荷様のそばに行き、ぺこりと一回、頭を下げた。お稲荷様の細長い目が微妙に大きく見開かれ、また細長く線になる。

「我に力を借りるとはどういうことだ。」

「はい。お稲荷様にここにいる物たちを、信用の置ける古道具屋に運んでやって欲しいのです。」

「我に引越し屋をやれと言うのか？しかし、こんなに沢山の物を運びこめるところなど、存在しないだろう。」

「お稲荷様は、全国に眷属がいらっしゃるでしょう？」

「うむ……。」

「皆様、商いの神様ですから、自分の管轄内の店舗には詳しいはずですよ。……。そこで、皆様に口扱いしていただいて、それぞれを手分けして運んでいただけないものかと思うのです。」

お稲荷様が、ちょこんと首を傾げた。口角が上がり、細い目が一層細くなって・・・。
「明月。思うではなくて、すでにそうしなければならぬ状況を作ったのではないか？」
「もちろん否と言われるなら、これから、人海戦術で人をかき集めて、トラックであちこちへ・・・という手もありますが、それでは、お稲荷様の庭先も騒がしくなるでしょう。それに、人力では何日かかることか・・・。その間、また、祠を傷つけられるようなことがないかと、心配なのです。」

「・・・・・・・・心配とな？」

お稲荷様は、ちらりと辻の抱えている油揚げを見る。

「ふふ、そこはそういうことにしておいてやろう。まあ、物は言いようだな。我が眷属への土産もあることだし、我も早く静かに暮らしたい。頼みを聞いてやろう。しばし待っていよ。」

お稲荷様はそう言うと、金色の光に変わって、祠の中に消えて行った。

辻がぼかんと口をあけて見ている。明月と目が合うと、はっと納得したように頷き、それで自分はどうすればいいのだという表情で見ている。

「お稲荷様たちが来られたら、その油揚げを配って行って下さい。」

辻は頷くが、向うの空き地に異変を感じて、心配そうに目を細める。明月がふりかえる。ぼやんと黒い靄が、物たちの下からにじみ出してきた。

わ、わ、わ。物たちが、いっせいに隅に逃げる。細長い敷地のほぼ中央だけ地面がのぞき、そこにあめ色の木製の椅子が現れた。ロッキングチェアだ。周りを黒い靄が取り巻いて、逃げようとする他の物たちを引きずり込もうとしている。危機感を感じ、それを回避しようと皆必至で後ずさる。四隅は、お稲荷様の結界が効いているので敷地から出ることは出来ない。どんとどんと、追い詰められて行く。・・・・・・・・。

ばさっ！そちらに向かって真っ白な塩を明月が投げつけた。黒い靄の勢いが小さくなる。

きこきこきこ・・・・・・・・。抗うように、ロッキングチェアをこぐ音が響く。今は、黒い靄はその椅子の周りだけ取り巻いている。

サビシイ・・・・・・・・。サビシイ・・・・・・・・。サビシイ・・・・・・・・。きこきこという音と共に、呟きが伴う。サビシイ・・・・・・・・サビシイ・・・・・・・・。繰り返される呟きがだんだん早くなり、椅子の軋む音がだんだん速くなる。ギイギイ、ほとんど悲鳴のような音を上げていく。

「おい椅子！それはお前の意思ではない！」

「違う！」

拒絶するように、椅子がわめく。ギイギイ。黒い靄が一層濃い色を増し、それを見て明月がちっと、舌打ちをする。駆け寄りざま、拳をつくりしゅっとひとつ腕を前に繰り出し、ファイティングポーズをする。すると、それに反応して、あるはずのない腕が伸びて、明月に殴りかかる。右へ左へ、その拳を避けながら、徐々に間を詰めて行く。あと、一步・・・・・・・・。

しゅっという風を切る音が明月の左側頭部をかすめ、一筋二筋の赤い髪がちぎれて舞う。

「勝負っ！」

明月はそう叫ぶと、ぱんちを繰り出す。椅子のあるはずのない拳へ、ありったけの気力を込めて、自分の拳を命中させた。瞬間、ぱちっと空気が弾ける。

あめ色の椅子の肘掛の先が少し欠け、黒い靄の勢いが小さくなった。

「その椅子に憑いている者っ、そこからとく去れっ！」

明月は間髪を入れず、どこから取り出したのか塩を投げつけて、符をばしっと貼り付ける。椅子はぴたりと動かなくなった。短く経を唱えると、手で印を結ぶ。周りには、風の音のようにしか聞こえなかったが、呪を唱えたようだ。

「持ち主の思いを叶えてやりたいという情ある厚意を汲んで、この人ならぬモノをもう解放してやれ。人ではないが、お前のことを思う心がひとつでもあったことに気付いて満足し感謝の心を持って、本来己の行くべき道を思い出せ。すでにこの世に留まることは出来ない。本来行くべき道へ・・・・・・・・。まだ、役目を終えていない物はこの地へ・・・・・・・・。因縁を断ち切りたまえ・・・・・・・・。」

明月の唇がうごく。声はなく、ひゅうひゅうと風の鳴る音が響いた。

印をきった手で、そっと符に触れると、黒い靄が四散した。きらきらと光の粒子が椅子のまわりで光っている。さっき撒いた塩の粒に日が当たって輝く。符がひとりではらりと剥がれて地に落ちた。

「終わったのか？」と。誰かが問うまもなく、祠が光り、中からお稲荷様ご一行が飛び出してきた。続々と集まって来るお稲荷様が、油揚げを貰うと、次々手分けして、空き地の物を運び出していく。帰りも、祠の中へ吸い込まれて行くのだ。あの小さな祠にどうやって入るのか、空き地の物たちはお稲荷様のそれぞれの力で、祠に吸い込まれて行く。

途中油揚げが足りなくなりそうで、慌てて鴨居やマスターに携帯で連絡をし、新たに大量の油揚げが追加された。何度目かの補充をしに鴨居とマスターが姿を消してすぐの、すべてが終わる頃には真夜中になっていた。

すべてが終わって、ガランとした敷地にぽつんと椅子が残されている。

「明月さん。あれ、どうするんですか？」

辻が訊ねる。

「うん。実は、長いこと持ち主の思いと同化していたんでちょっと影響が残ってるかもしれない……。出来れば、沢山のお客さんが来て、こいつが満足出来る所がいいんだけど。」

掛けた肘掛の部分がどうにも貰い手がなさそうだ。明月がそっと椅子を撫でた。

辻はその言葉を聞いてうーんと心あたりを考えてみる。丁度、追加の油揚げを持ってきてくれたマスターと視線が合う。目が合うと、マスターが何という顔で問い返した。

「うーん。店の雰囲気壊すものじゃないし、お持ち帰りするか……。しかし、この肘掛の部分どうするかなあ。知り合いの道具屋に相談するかなあ……。そう言えば、もうひとつ。」

「？」

辻と明月の視線に、マスターは、自分のぶら提げてきた紙袋を、ちょっと手を上げて示す。

「あ……。油揚げ残っちゃいましたね。」

「明日は、大量にごはんを炊いて、いなりずしを作るよ。お稲荷様にもお酒といっしょに沢山お供えしますね。」

マスターが、まだそこに姿を現しているお稲荷様に向かって言う。お稲荷様は、にゅっと目を細めて、うれしそうにしている。

そこへ、椅子を運んできた明月が、祠の脇に生えている樹がら、枝を折り取る許可を得て、四本緑の葉の付いた枝を持って空き地の四隅に一本ずつ挿していく。最後にこれも、頂いたお供えの酒をさっと地面に撒いた。戻って来て、お稲荷様にお礼を言い、金色の光が祠に吸い込まれて消えた。

「あ、何だ。もう終わったのかい。」

やっと帰って来た鴨居が、自分の持って来た大量の油揚げをみて嘆く。

「まあまあ、それも明日いなりずしにするから……。食べに来て。」

「おいなりさんか、楽しみだ。じゃ、早いとこ撤収しましょう。実は、さっき連絡がはいて、夜中にごそごそしてるんで不審者扱いになってるんだ僕ら。そろそろ警察が来る。まだ、するこ

と残っているなら、足止めの手配するけど・・・。」

「げっ。」

全員が慌てて、立ち去る。辻と明月が椅子を抱えて一目散に逃げていく。明月の式神うさぎはすっと姿を消したがおそらくちゃんについて来ているのだろう。翌日訪れた定休日の利休庵に辻が入っていくと、うさぎが定位置のカウンター脇に新しく置かれた椅子に、ちゃっかり座って、時計を何度も眺めて時刻を確かめ、にやにやしなながら、ゆらゆら揺れていた。

利休庵で大量のいなりずしをタッパーに詰めてもらい、酒を持って辻は明月とともにあの祠に向かった。

祠の前に、タッパーと、酒の入った瓶を供える。頭を二回下げ、ぱんぱんと手を叩く。もう一度頭を下げ礼をすると、不思議なことに、タッパーごといなりずしと酒も消えていた。辻は、目を見張る。お稲荷様が受け取ったのだと分かってはいるが、どうにも不可解な現象だ。明月に促されて、帰ろうとした時、人がやって来るのと出遭った。

「あ～！あんたたち昨日うろうろしていたあ！」

箒を持ったおばさんが路地の入り口で、二人を指差し叫ぶ。

「すみません。昨日荷物を運び出すのにやかましかったですか……。」

明月がとっさに頭を下げる。とんと肘で突かれて、辻がやっと思ひ付く。

「市の職員です……。実は、ここの空き地にごみが積み上げてあると沢山の苦情がありまして……。その敷地の持ち主の了解を得て、昨日荷物を撤去させていただきました。どうもお騒がせしました。こちらに祠があったのを思い出しまして、散らかしてしまっていたら申し訳ないと思い、もう一度確認に来たんです。あ、こちらは、昨日バイトに来てた人で、やはり気になって個人的に見に来たんだそうです。」

何だかすらすらと、嘘を述べている。部署があることはなるべく秘密にしておけとすることなので、マニュアル通り辻は適当にもっともらしい言い訳を口にする。どのみち、そんな部署のことを説明したところで、信じてもらえない。うさんくさいだけだ。おばさんは、納得したようにうんと頷く。

「ごみ収集の人……。あら、この敷地の持ち主って、よく承知したわねえ。昔はいい人やったみたいだけど、急に人が変わったみたいになってねえ。いくら苦情を持ち込まれても平気やったらしいわ。そのうち、連絡も取れなくなったらしくて……。」

「病院に入院してらっしゃいますよ。片付いたことを報告に行ったら、憑き物が落ちたような顔をして、多くの方に迷惑をかけたってすまなそうにしてらっしゃいました。」

「へえ……。」

これは、本当のことだ。おばさんは、聞きながら、箒で祠の前を掃いていく。狭いところなので、避けるのが大変だ。おばさんは、手を止めてざっとみまわして、ひどく汚れていないのを確認すると、辻と明月にむかってにっこりと笑う。

「掃除は私がしておきますから、どうぞ行ってくださってかまいません。若い人は他にも、仕事があるでしょ？」

あ……邪魔しているのか。辻と明月は、そそくさと退散する。

「お言葉に甘えて、ありがとうございます。」

「ううん。かまへんよ。いつもの日課やから。」

そんな言葉を交わし、その地をあとにした。

道の向こうから、お坊さんが笠を被って足に脚絆を巻いた姿で一列になり、経を唱えながら歩

いていく。六月のうす曇りの独特の沈んだ空気のなかに、経を読む声が溶けてゆく。見慣れた光景だが、辻はぼんやりとそれを目で追い見送った。

「この仕事するまで、考えたことがなかったけど……。考えてみれば、この小さな祠にも世話をする人が存在するんだよな……。」

辻は、今、通り過ぎた祠を示して言った。小さな祠は石の台の上にちょこんとおかれていたが、線香をあげたあとが残っており水と水水しい花が供えられている。きちんと世話をする人がいるのだ。町のあちこちにある無数のこうした祠は、ほとんどが近隣に住む人たちによって大切にされている……。

「ま、人が多いからこそ問題も多かったわけだろうし……。平穩に暮らしたいというのがほとんどの人の望みじゃないか。平穩に暮らしたかったら、それなりそれぞれ個人の努力も必要だし、心の持ちようだと俺は思うが。」

明月が通り過ぎた大きな神社の鳥居をちらりと見た。そこに居た鳩たちは、人が近付いてもあまり驚かず、慌てて逃げるようなことはない。

「世話をして……させてもらってありがたいという気持ちは、すごいことだろう？ 普通人同士だとそんな気持ちにはならない。けれど、ご利益があると思っているから、感謝して手を合わせる。始めは、そんなところかな。でも、感謝の気持ちは持っている人ってのは、普通の人間関係ならばうまくいってるはずだ。ありがたいという言葉は、言われたひともうれしい。それに大抵そういう人は、気付く力も持っているから、変化も出来る。悪縁も、断ち切る力も自ずと備わっているわけだ。ちょっと、横道それちゃったか……。」

「……。」

「まあ、そんなわけで、小さな信仰があちこちに存在して、祀らなければならない恐いものも含めて、世話をさせてもらう人がいるわけ。一種の生活の知恵かな。けれど、きちんと大切にされてるところが沢山存在するから、この町が浄化される。人の多いところは、どうしたって軋轢が生じるから、京都は古い都だったとことだし必要なことだ。京の言わば結界ってわけ。」

「あのお稲荷様みたいに守護してくれるものも現れるってわけか……。」

「そう。たぶんにきまぐれだけれどね。」

「はあ……。まあ、やってる仕事の必要性もなんとなく理解できました……。明月さん。何か鳴居さんに言われたでしょ？」

「あ、わかる？ 機会があったら、少しずつ話してやってくれって。何となくよりも、この町にとって必要なことなんだと、必要性を感じて仕事してるほうが納得がいくだろうって。辻さんに逃げられたら、後を探すのが大変なんで、実は必死なんだよ。」

「勝手に変われないでしょ、どっちみち。」

あははと笑う明月に、辻があっさりと答える。もう、賀茂川の近くまで来ていて、やっぱりこの辺の繁華街でも、ちょっとしたところに、祀られた小さな信仰が生きている。ひょっとすると辻が見たような不思議も経験した普通の人も多く存在したのかもしれない。ふと、そんなことを思った。

「さて、がんばって報告書を書いて、今日は早く帰るぞ！」

うーんと背伸びした。明月と分かれて、辻は庁舎に戻っていく。
人知れず、京の結界を守る部署がある。ないしょの、ないしょのお話だ。

終わり

別名分室陰陽寮利休庵

<http://p.booklog.jp/book/26596>

著者：みん兎

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokinoizumi3/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26596>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26596>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.